

大通公園を望む窓辺から

北海道医師会館

副会長 すずき のぶかず
鈴木 伸和

16年間通い続けた札幌市医師会館を離れ、北海道医師会館をホームにするようになって1年が過ぎた。本タイトルにもあるように、ここからは四季折々のイベントが開催され札幌市民や観光客で賑わう大通公園を眼下に捉えることができ、その眺望を私は大いに気に入っている。立地もまた札幌の中心部である地下鉄大通駅からほど近く、申し分ない。だがそれでも残念に思うことが一つある。それはこの北海道医師会館があまり市民に知られていないということだ。

例えば札幌市内でタクシーに乗車して「医師会館まで」と言ったとしよう。大概の運転手は「どちらの医師会館ですか」などと尋ねることもなく大通西19丁目にある札幌市医師会館に向かおうとする。そこで私はタクシー乗車時必ず「大通西6丁目にある医師会館まで」と伝えるようにしているが、そうすると「??」となったりするのである。知られていない理由、それは北海道医師会館であることを知らしめる看板が付いてないからに他ならない。

改めて会館をじっくりと観察してみた。そこで初めて建物の東側面に比較的大きく北海道医師会館の文字看板があることに気づいた。建築当初はそれなりに目立っていたに違いない。だがその後隣りにマンションが建って文字看板がその陰に隠れてしまい、今に至るといのが事の真相か。北海道医師会館の文字看板は正面玄関の上にもあるが、これは残念ながらあまり目に留まらない。目に留まるのはむしろ建物に取り付けられた店子の「室蘭信用金庫」の看板。よもや市民がこの会館を室蘭信用金庫の建物だと思っていたりはしないだろうな。

この際この大通公園に望むようにどーんと大きな看板を取り付けて、この会館の認知度を上げ、北海道医師会の存在を再認識してもらってはどうかと一人勝手に思い描いている。

かかりつけ医とコロナ

常任理事 いとう としみち
伊藤 利道

最近、かかりつけ医の議論をよく耳にします。

日本医師会では、かかりつけ医を「なんでも相談できる上、最新の医療情報を熟知して、必要な時には専門医、専門医療機関を紹介でき、身近で頼りになる地域医療、保健、福祉を担う総合的な能力を有する医師」と位置づけてきました。コロナ禍で発熱時の相談やオンライン診療をするかかりつけ医の役割が注目されてきたのだと思います。私は内科無床診療所の開業医ですが、「何でも相談できる」には対応しておりますが、「総合的な能力を有する」については自信ありません。

コロナに関しては、当初から通院患者さんで発熱している場合は診療しておりました。今年2月からは診療・検査医療機関に登録し、通院患者さんの発熱を診ることにしました。オミクロン株になってからは、重症者はほとんどいなくなり、最初は電話による健康観察も行っていましたが、咽頭痛が長引く患者さんが数名いたくらいでした。8月からは発熱外来として、普段かかっていない患者さんも診察することにしました。現在10名の枠で診療しておりますが、半分が通院中で発熱した患者さん、半分が保健所より紹介のあった初診の患者さんです。最近は65歳以上の患者さんは少なくなり、HER-SYSへの登録の手間が減って楽になりました。

ウィズコロナのせいなのか、最近は健診を受けに受診する方が増加しております。胃カメラや大腸ファイバーを受ける方も増加しております。それにコロナ陽性となった患者さんが数名いると、かなり忙しい状態となります。

札幌市の保健所を中心としたコロナ診療体制は良くできていると思います。かかりつけ医として今後も協力したいと考えますが、できれば一気に患者数が増加することなく、またコロナウイルスが弱毒化していくことを願っております。

